

京都の散歩道 (10) 桑原武夫先生たちによるフランス革命研究

先月は京大の東洋史学を話題にした以上、今月は京大のフランス研究を話題にせずにはいられないと思います。まずは、以下に①～④の名著・名訳書と、それらの著者・訳者の写真を並べてみます。



桑原武夫
(1904-1988)



河野健二
(1916-1996)



上山春平
(1921-2012)

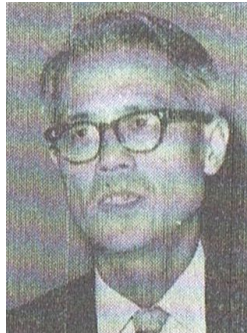


樋口謹一
(1924-2004)



多(夢)田道太郎
(1924-2007)

以上の写真は、『京大広報』 <https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/196363>
341号(1987.11) 506号(1996.10) 681号(2012.9) 587号(2004.2) 631号(2008.2)
(桑原先生は文化勲章受章記事、他は訃報)からです。一方、執筆当時の写真も『世界の歴史10』と『世界の名著37』(中央公論社)の創刊時付録より入手できましたので、25～50年程度の差があってもどちらも貴重と思い以下に掲載します。(ご尊顔の変化もさることながらメガネの流行変化も顕著です。)



①桑原・河野・上山・樋口：『フランス革命とナポレオン』

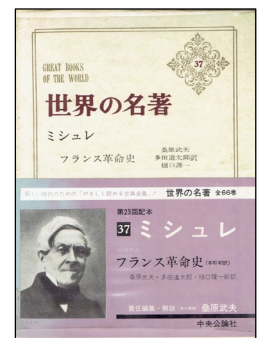
世界の歴史10、中央公論社(1961) → 中公文庫(1975) [オリジナル版と文庫版のページ割は全く同一で、両者とも索引がないのは惜しいですが、文庫版には年表が追加されています]

②J. ミシュレ：『フランス革命史』

＜訳：桑原・多田・樋口＞

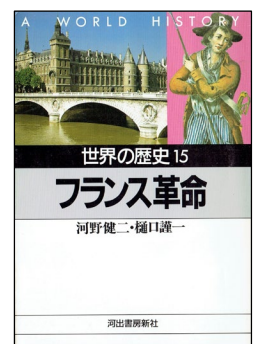
世界の名著37、中央公論社(1968) → 中公バックス(1979)

→ 中公文庫 上下(2006) [オリジナル版の付録には桑原先生と司馬遼太郎(1923-1996)氏の対談がありますが、一方、文庫版には小倉孝誠氏の32ページに及ぶ解説があります。文庫本は現在も新規入手可能です。]



③河野・樋口：『フランス革命』

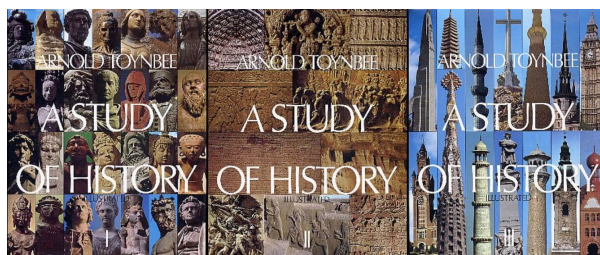
世界の歴史15、河出書房新社(1969) → 河出文庫(1989) [オリジナル版と文庫版のページ割は全く同一で、前半が河野先生で後半が樋口先生。オリジナル版には合計24ページのカラー写真が挿入されていますが文庫本にはありません。しかし、索引は文庫版の方が拡充されています。現在はKindle版が入手できます。]



④A・トインビー:『図説 歴史の研究』

＜訳: 桑原・樋口・橋本・多田＞

学研(1976)〔1冊版と3分冊版があります。いずれも3kg以上ある大きく重い本です。なお、新たに第3訳者の橋本峰雄先生(1924-1984: 写真入手できず)は京大哲学科出身ですが、神戸大教授にして鹿ヶ谷にある法然院の第30代貫主だったとのこと。〕



桑原武夫先生については、京機会ニュースNo.43、pp.16-17(2021年10月)の拙記事 <https://keikikai.jp/wp-content/uploads/2021/10/newsNo.43.pdf> でも少し触れました。今から70年以上も前のことなので若い方はご存じないかもしれませんが、フランス文学を専門とする桑原先生が1948年に東北大から京大人文学研究所(本ニュースレター口絵は分館)に戻られて以降、多彩な研究者で構成する学際共同研究システム〔ルソー研究(1951)、フランス百科全書の研究(1954)、フランス革命の研究(1959)(後述の①)、ブルジョワ革命の比較研究(1964)、中江兆民の研究(1966)、文学理論の研究(1967)、ルソー研究第2版(1968)〕を推進するとともに多くの弟子を育てられたことは京大の輝かしい歴史の中でも特筆されることです。そこで今回は、とりわけ若い方に向けて、世界史の中でも極めて重要かつ興味深いフランス革命に関する桑原先生たちの著作を紹介したいと思います。これらは60年から45年前の本ですが、決して古さを感じさせない名著(名訳)中の名著(名訳)であると思います。前掲書①について、フランス革命に関して多数の著作のある安達正勝(1944-、京大の仲間内ではなく東大出身)氏の『物語フランス革命』(中公新書、2008)の文献案内でも「桑原武夫編『フランス革命とナポレオン』中公文庫(世界の歴史10) この本は、ごく一部、日付や人名表記等の間違いがあるが、日本語で書かれたフランス革命史の中でもっともすぐれていると私は思う。」と第一に挙げています。



ここで、前述の学際共同研究システムの成果の一つであり、前掲書①の元となった①桑原武夫編:『フランス革命の研究』、岩波書店(1959)を紹介します。



共同研究参加者											
京都大学人文科学研究所											
京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部
中川久	田村静	吉田静	芝田静	樋口美都	森口美都	豊田美都	前川貞次	飛鳥井雅	山田喜	藤岡喜	牧岡喜
多田道太郎	上野春平	河野健二	井上清	今西錦司	桑原武夫						

これは、1953.11～1958.6の4年半ほどの間に、上記のようにさまざまな分野の18人の研究者が124回の研究会を開いた成果をまとめたものです。その「はしがき」で、以下のように述べておられるのは重要と思います。「かつて『ルソー研究』を公けにしたとき、イデオロギーを異にする人びとの集まった共同研究の弱味ということが指摘された。たしかにあの研究には思想の一貫性がとぼしく、その批判は正当であった。ただ、さまざまの考え方をもち人びとの協力は、基本的な点について的一致があるかぎり(たとえば、フランス革命についてテーヌ¹的見解をとるものの皆無)、特定の一(“1”の漢数字)イデオロギー(長音符)にたつ人びとの集まりよりも、自由発想の幅と量が多く、そのシゲキが生産性を高める利点のあることに評者は気づいていなかった。私たちは三つの共同研究を重ねるうちに、協力者のうちにおのれの基本線をすてた転向ではなく、相違の中の接近ともいうべき空気が生まれたことを、この上なき幸福とし、またいささか誇りと思うものである。」



筆者は、①は文庫版発行当時から目を通しておりましたが、その著者4人中の2人が8年後に上梓された③の方は最近気付いたに過ぎません。さらに、今回の記事をまとめるに際し前述の①に加え②と④を確認しないのは方手落ちと思い、急遽“日本の古本屋”経由で古書を購入しました。特に、②のミシュレの書は、桑原先生が「本書はそのフランス革命を最も生き生きと伝える名作であるが、同時に、歴史叙述の模範として推奨する価値がある」と絶賛しておられ、いうまでもなく①や③のバックグラウンドの一つともなっています。なお、ミシュレの浩瀚な原著11巻を『世界の名著』全集の規格(550ページ)に収めるため「若干の重要な章は全訳し、その他の章は7ポ活字(注:文庫版では10級)を用いて要約するが、そのさいも、特色的な個所は8ポ活字(注:文庫版では12.5級)で直訳すること」で約5分の1に圧縮されています。全編にわたり印象深く、とりわけロベスピエールの最後(かつ全編の最後)は劇的です。また、1789年10月5日、数千のおかみさんたちが「パンをよこせ！」と叫びながら国王(ルイ16世)と議会に要求してパリからヴェルサイユに行進し、王室をパリにつれてゆくのでなければ承知しないといって夜を徹して座り込んだ結果、やむなく王室は承諾し翌6日午後パリのチュイルリー宮殿に向けて行進する個所で、「十月六日の革命、必要で正当な革命[そうしたものがあるとしてのことだが]、まったく自発的で予想外で、真に人民的なこの革命は、とりわけ女性の行なった革命であった。七月十四日の革命が男性の革命であったように。男はバスチーユを奪い、女は王を奪った。」と表現することも筆者には印象的でした。

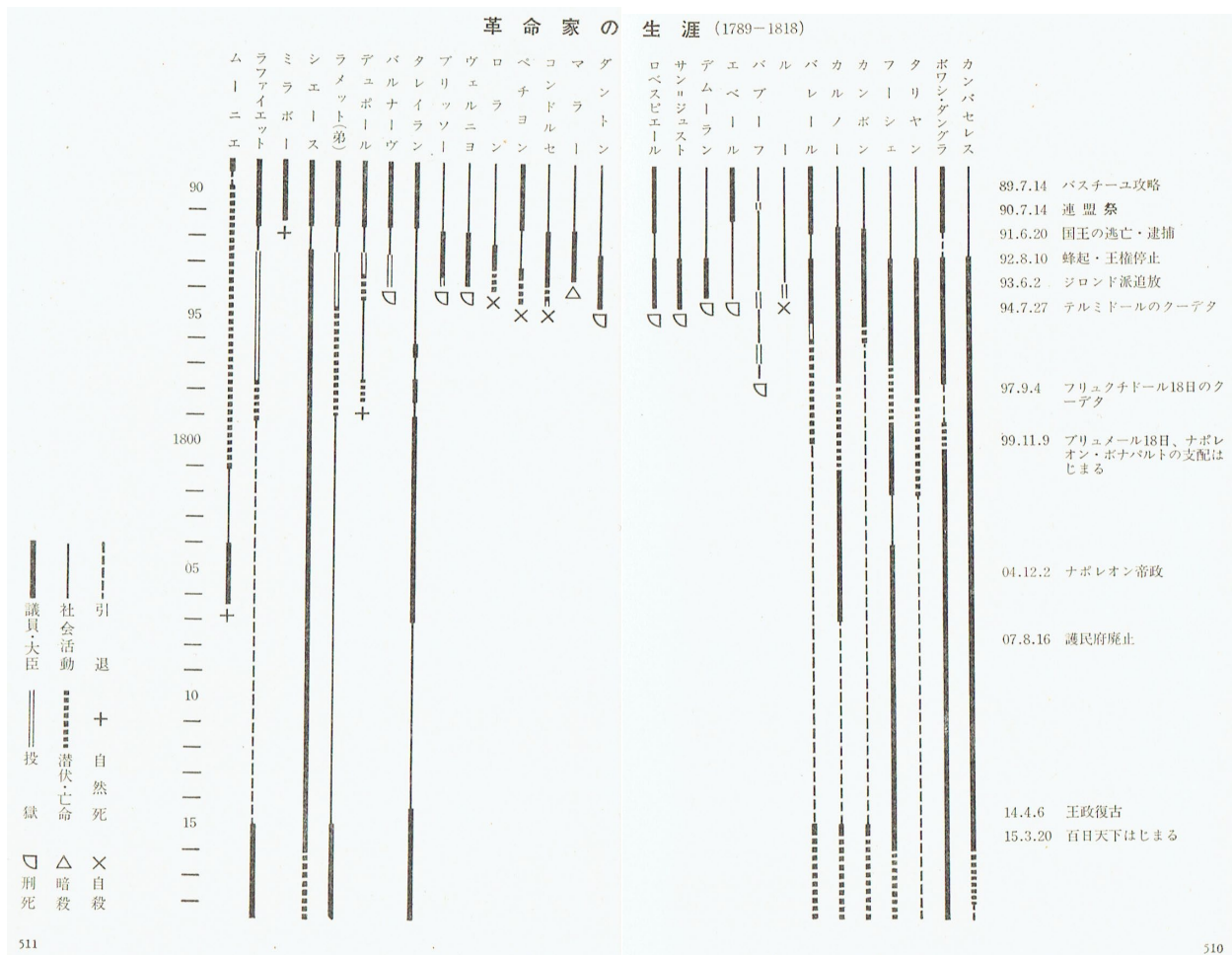
以下の「革命家の生涯」の棒グラフ図は、共同研究報告書①の中で作成され、いくぶん省略された図は③にも掲載されていますが、7年後に②の補足資料として再掲されたものです。これは、フランス革命を演じた主要人物の視点から激動の30年間をおおまかに一望できる貴重な図ですが、革命の展開は極めて複雑です。

¹イポリット・テーヌ(1828-1893)

熱工学を専門とする筆者の立場からは、熱力学第2法則の礎を築いたサジ・カルノー（1796-1832）の父ラザール・カルノー（1753-1823、「organisateur de la Victoire」 「勝利の組織者」と呼ばれました）が軍人および数学者・工学者としてフランス革命の中で活躍するのが印象的です（③には索引もあるので、カルノーの活躍が極めて多岐にわたっていることが容易に確認できます）。



ラザール・カルノー サジ・カルノー



以上、紙面の制約以前に筆者の力では桑原先生たちの大研究を的確に要約してご紹介するのは難しいですが、多少なりともご参考になれば幸いです。なお、次ページ以降には本稿の付録として

『桑原武夫集』（全10巻、岩波書店(1980~1981)：年代順編集)

『桑原武夫全集』（全8巻、朝日新聞社(1968~1972)：テーマ別編集)

の総目次、さらに文藝春秋誌での記事一覧を追加します。

また、松尾尊兌(たかよし:1929-2014)先生の

『滝川事件』、VI-四 ある日の桑原武夫先生、pp.366-375 岩波現代文庫 (2005) にも興味深い記述があることを付記します。

『桑原武夫集』全10巻、岩波書店（1980～1981）総目次（編集人作成）

1 1930～1945

尾上郷川と中ノ川
スタンダールの芸術について
積雪期の白根三山
スタンダール
虚子の散文
服装と行為
山岳紀行文について
あの頃のこと
小説の読者
富岡鉄斎展を見て
能郷白山と温見
湖南先生
『遠野物語』から
パリの公園
ファーブル博物館
ブルターニュ紀行
パリ大学開講式
文学的フランス
アラン訪問記
パリの本屋など
早春日記
ドイツ紀行
ラシーヌへの道
ニームの闘牛
美術品の防衛
山遊び
慰戯としての文学
『古代弁自序』を読んで
鈴鹿紀行
キーツの墓
フーレ先生
コンパニョナージュ
アメリカ大陸
黒人街
モンテーニュの城
スタンダール遺跡めぐり
政治遊戯
芸術家の実生活と作品
戦時下の登山
鳥の死なんとする
展墓
詩人
二十年前の三好達治君
歴史と小説
登山の文化史
『クレヴの奥方』について
『三国志』のために
ざくろの花
書物について
五十マルク札
外国文学研究の反省
ヴァレリの『スタンダール論』
現代フランス・ヒューマニズム
町一番の風呂

西田先生の一面

2 1946～1950

趣味判断
文学修業
日本現代小説の弱点
断想
ものいいについて
フランスの一左翼作家
ブルデル雑記
文芸俗話
西洋文学研究における孤立化について
アランの政治思想
第二芸術
三好達治君への手紙
短歌の運命
洞察について
谷崎潤一郎氏のインエイ・ライサン
横光利一氏の『秋の日』
芭蕉について
パリの下宿
マルロー研究
ずり落ち
反訳について
文学における伝統
地方文化私見
織田作之助君のこと
フランス文学におけるドイツの影響
君山先生
やむを得ぬ滅亡
スタンダールの世界文学賞
エコール・サントラル精神
仙台を去るにあたって
歴史と文学
『イタリア絵画史』のスタンダール
レーヴィットの『ヨーロッパのニヒリズム』
戦後の宮本百合子
伝承問答
高原の幸福
法隆寺の壁画
平和の発見
文学者と酒
人間認識
フランス的ということ
書評のない国
人間の戦い
素朴ヒューマニズム
読みそこない
文学批評について

3 1950～1953

文学入門
鷗外と不俗

宛名のない手紙
ジッドの死をきいて
私の読書遍歴
『ルソー研究』序言
ルソーの文学
伝統
北海道断想
鷗外の『高瀬舟』そのほか
ヘミングウェイ『武器よさらば』
あくまで平和を
西洋文学研究者の自戒的反省
人間性の試金石
今日における歌舞伎
読書
漢文必修などと
文化遺産のうけつぎ
丁玲における尖鋭さ
アラン
南方熊楠の学風
予想あそび
日本映画の成長
杜甫の『贈衛八処士』について
パスカルの時計のパンセの解釈
『魯迅評論集』を読んで
みんなの日本語
家元制についての私的感想
外国人を招くことについて
伊東静雄の詩
三好達治の『測量船』について
文学とはなにか

4 1954～1956

考古遊記
アマクチの流行
榊亮三郎先生のこと
平和運動と誓い
文学批評と価値判断
『百科全書』の芸術論
啄木の日記
『七人の侍』
旧友の文章
日本知性への注文
敗戦前後
自己解説
学問を支えるもの
しろうと農村見学
河上肇『自叙伝』
トルストイ『戦争と平和』入門
『近松物語』の感動
ソ連の宗教
アルメニア紀行
ショーロホフ五十の賀
ソ連・中国の乾燥性

社会主義国の女性雑感
四川紀行
日本文化論のあり方
明治の再評価
博雅の士貝塚茂樹
漢の高祖の『大風歌』について
歴史における人間の尊重
恐怖政治の大天使・サン＝ジュスト
幼いころの絵本
森外三郎先生のこと

5 1957～1959

ニアリング夫妻との一タ
ノーマン博士の思い出
『大菩薩峠』
西堀南極越冬隊長
日本的とはなにか
芸術の社会的効果
郭沫若氏の一面
『明治天皇と日露大戦争』
国際ペン大会の印象
伝統と近代化
『揚州八怪』から
河野学派の落第生
第一級の文化論
美人観を調査する
国文学のあり方
チョゴリザ登頂
現代日本における古典のあり方
科学技術時代と古典の運命
フランス・ナショナリズムの展開

6 1959～1964

研究者と実践者
日本の教育者
叱るといふこと
ケンソン
眠り上手
一九六〇年論壇時評（十二篇）
日本は小国ではない
ひとはいさ
宇宙時代と古典
人を知る明のない先輩
伊勢神宮の国有化
私のノンフィクション
ジャワの十日間
安保阻止運動
青年の冒険精神
永井荷風
ショーロホフ『静かなドン』
中野重治をめぐる雑談
ナショナリズム論について
日本文化の考え方
日本文化雑感

仲間の結合
存在としてのインド
大正五十年
インド史学界の新巨星
ローマ字新聞
シンポジウムに招かれての感想
緑のしげみ
柳田さんの一面
ルソー思想の世界への浸透
パワー・ポリティックス
アフリカひとのぞき
松本清張の文学
インド・ネパールの旅
現在も生きる心情
狩野先生逸事
後進国問題の考え方
おやじ
ベンガルの槍騎兵
錬金術師の早技

7 1965~1969

近代日本における歴史学
ある明治のナショナリスト
萩原朔太郎の庭見物
憲法第一章についての感想
ふたたび江刈村へ
ベトナムについての感想
和魂洋才の変転
人間兆民
ふるさとを行く
心の痕跡
今西錦司論序説
名を知っているということ
東北の可能性
明治百年を迎えて
こころづくし
小島祐馬先生を偲ぶ
『桂春団治』序にかえて
近代化における先進と後進
文学価値論
人民史家ミシュレ
私のなかの中国

ヨーロッパと日本
人文科学における共同研究
読書家と観察者
仙台の五年間
中天に輝く天体
桑原隲蔵小伝
父の手帳
トレギエから
トレギエの二週間
現代社会における芸術
日本の百科全書家新井白石

8 1969~1974

思い出すこと忘れえぬ人
ブータン入国記
一致と影響
『中央公論』創刊一〇〇〇号を迎えて
流行言
ヨーロッパ文明と日本
奇人
駒井能登守のために
林達夫について
カタカナの氾濫
昔話
人間性について
三上章を惜しむ
書についての雑談
夢
川端康成氏との一タ
大事件にひもをつけよ
松本清張の処女作
平和の条件としての文化
大学生と俳句
世界の日本学
明治革命と日本の近代
石油の国
モスクワとバクー
ヨーロッパの出かせぎ労働
志賀高原と三好達治
志賀さんの思い出
好きなことば
奈良時代の志賀さん

永井荷風の生活と芸術
鉄斎の芸術

9 1974~1977

論語
現代日本文明について
本当の政治論
今西錦司について
ニーダム博士と私
中江兆民の洞察
おのずと
丸山薫弔辞
シルクロードの旅から
元号について
トルコの印象
トインビー『図説歴史の研究』について、
日本論壇の弱点
町的美観は誰のものか
現代本文明について
文学における悪
柳田国男『遠野物語・山の人生』解説
内藤湖南『日本文化史研究』解説
壮絶な準備
青果雑感
西洋音楽と中国・日本
天下の大勢
達人マルローについて
知的関心としての民俗学
私の敦賀
左派の長者
都のかたち
竹内さんと私

10 1977~1980

懐しい土居先生
三つの挿話
日本のフランス文学研究にのぞむ
紀元二〇〇〇の挑戦
未見の知己

ヨーロッパの印象
兆民への接近
インディオの山高帽子
中国について
年の初めの願いごと
宇野久夫『髪形の知性』序にかえて
半世紀の思い出
別荘
ルソーの魅力
歴史と人間
工業化時代におけるクラフト
加藤周一氏をめぐる断片語
内発的文化的知的創造性について
甘くない国際理解をゼイタクということ
八木一夫弔辞
虚子についての断片二つ
名和君の酒、
国際ペン大会に参加して「文化力」ということ
富士正晴の詩
追憶
風俗学とその周辺
国際コミュニケーションと日本文化
弔カイヨワ
朝永さんのこと
吉川君のこと
文章作法
高仙芝について
木村さん
甲信越と私
中国に父をしのぶ
着任
文字村疎開記
自由・平等・友愛と現代世界
推薦文（四十四篇）

『桑原武夫全集』全8巻、朝日新聞社（1968~1972）総目次（編集人作成）

第1巻

文学とはなにか
文学入門
小説の読者
慰戯としての文学
芸術家の実生活と作品
孤独について
日本現代小説の弱点
文学批評について
文学批評と価値判断
芸術の社会的効果
ヘミングウェイ『武器よさ

らば』
ショーロホフ『静かなドン』
トルストイ『戦争と平和』入門
漢の高祖の『大風歌』について
杜甫の『贈衛八處士』について
鷗外と不俗
石川啄木
啄木の日記
永井荷風

戦後の宮本百合子
三好達治君への手紙
三好達治の『測量船』について
伊東静雄の詩

第2巻

文学的フランス
フランス的ということ
現代フランス・ヒューマニズム
ラシーヌへの道

パスカルの時計のパンセの一解釈
『クレヴの奥方』について
スタンダールの芸術について
スタンダール
『イタリア絵画史』のスタンダール
ヴァレリの『スタンダール論』
中天に輝く球体

アラン
アランの政治思想
ジッドの死をきいて
フランスの一左翼作家
マルロー研究
フランス文学におけるドイツの影響
西洋文学研究における孤立化について
西洋文学研究者の自戒的反省
コンパニョナーージュ
政治遊戯
フランスの室内遊戯
(フランス・)ナショナリズムの展開

第3巻

ひとはいさ
洞察について
第二芸術
芭蕉について
短歌の運命
文学修業
文芸俗話
谷崎潤一郎氏のインエイ・ライサン
横光利一氏の『秋の日』
文学者と酒
美術随想
なぜ小説を読まないか
今日における歌舞伎
家元制についての私的感想
富岡鉄斎展を見て
『遠野物語』から
『三国志』のために
南方熊楠の学風
『大菩薩峠』
『揚州八怪』から
劇場での感想
映画論(六篇)
ものいいについて
むつかしすぎる
反訳について
漢文必修などと
むつかしい文章
みんなの日本語
国文学のあり方
宇宙時代と古典
ローマ字新聞
伝承問答
文化遺産のうけつぎ
伝統
伝統と近代化
日本文化の考え方
日本文化雑感
歴史と小説
伝統と民族性
文学における伝統
歴史と文学
国民文学論について
歴史における人間の尊重

近代日本における歴史学

第4巻

人間認識
湖南先生
君山先生
狩野先生逸事
森外三郎先生のこと
西田先生の一面
榊亮三郎先生のこと
柳田さんの一面
ある明治のナショナリスト
河上肇『自叙伝』
『桂春団治』序にかえて
詩人
萩原朔太郎の庭見物
二十年前の三好達治君
錬金術師の早技
中野重治をめぐる雑談
今西錦司論序説
西堀南極越冬隊長
旧友の文章
博雅の土貝塚茂樹
ベンガルの槍騎兵
やむを得ぬ滅亡
織田作之助君のこと
人を知る明のない先輩
アラン訪問記
フーレ先生
ニアリング夫妻との一タ
郭沫若氏の一面
ノーマン博士の思い出
恐怖政治の大天使・サン＝ジュスト
ざくろの花
書物について
展墓
町一番の風呂
車中にて
仙台を去るにあたって
高原の幸福
私の行楽
月のことば
叱るということ
ケンソン
眠り上手
心の痕跡
趣味判断
アマクチの流行
美人観を調査する
研究者と実践者
日本の教育者
科学振興と国語問題
科学技術時代と古典の運命
日本学術会議のために
大学における自由の考え方
『ルソー研究』序言
人文科学における共同研究
桑原隲蔵小伝
おやじ
こころづくし
私のうけた家庭教育

幼いころの絵本
一度もない転機
河野学派の落第生
仲間的結合
初期の文章三篇
自己解説

第5巻

鳥の死なんとする
断想
文学雑誌のあり方
角帽
法隆寺の壁画
平和の発見
引揚げ
或る小事件
人間の戦い
素朴ヒューマニズム
宛名のない手紙
私はユートピアなどいらない
あくまで平和を
外国人のいうこと
人間性の試金石
講和を祝う歌について
日本インテリの弱さ
ナショナリズムと文化
予想あそび
外国人を招くことについて
思想の自由と伝統
鴨東線は早くつくるがよい
付記 鴨東線とは、現在、大阪から三条まで来ている京阪電車線を北へ出町柳まで延長して、叡山電車と連絡せしめようとするもので、京都市会では数年来の懸案となっていた。この公聴会后、開設案が可決された。(編集人注:「現在」とは、本書発行時の1969年1月のこと)
雲の中を歩んではならない
平和についての架空座談会
平和運動と誓い
日本知性への注文
敗戦前後
学問を支えるもの
明治の再評価
日本文化論のあり方
教養主義のゆくえ
革命と伝統
にぎやかな日本
身から出たサビ
日本的とはなにか
進歩的ということ
時のながれ
ヒューマニズムを使ってみて
私たちの憲法
一九六〇年論壇時評(十二篇)

日本は小国ではない
伊勢神宮の国有化
安保阻止運動
青年の冒険精神
低姿勢と高姿勢
ナショナリズム論について
大正五十年
パワー・ポリチ(ティ)ックス
鉛色の空の下での断想
論争について
多数人口と日本文化
見物人の感想
憲法第一章についての感想
ベトナムについての感想
万国博基本理念
市民から市民への訴え
和魂洋才の変転
明治百年を迎えて
むりな注文かもしれぬが
西洋崇拝からの脱却

第6巻

緑のしげみ
早春日記
パリの下宿
パリの公園
パリの本屋など
ファーブル博物館
パリ大学開講式
スタンダール遺跡めぐり
モンテーニュの城
ニームの闘牛
ブルターニュ紀行
ドイツ紀行
五十マルク札
キーツの墓
アメリカ上陸
黒人街
私のみたアメリカ市民
訪米雑感
モスクワ第一信
日本語のできるロシア人
ソ連の中学
ショーロホフ五十の賀
ソ連における文学研究についての感想
アルメニア紀行
中国の言語政策
人民解放軍歌劇団
新中国の見方について
四川紀行
私のなかの中国
生産文化と消費文化
社会主義国の女性雑感
ソ連・中国の乾燥性
共産主義国をどう見るか
ジャワの十日間
インド・ネパールの旅
インド史学界の新巨星
存在としてのインド
アフリカひとのぞき

国際学生セミナーに参加して
国際ペン大会の印象
後進国問題の考え方
近代化における先進と後進
ヨーロッパと日本

第7巻

登山の文化史
積雪期の白根三山
能郷白山と温見
鈴鹿紀行
尾上郷川と中ノ川
服装と行為
あの頃のこと
山遊び
ずり落ち
なつかしさ
山岳紀行文について
チゴリザ登頂
地方文化私見
北海道断想

しろうと農村見学
ふたたび江刈村へ
東北の可能性
考史遊記
ふるさとを行く
読書
読みそこない
書評のない国
読書家と観察者
松本清張の文学
司馬文学について
書評九篇
すいせん文十六篇
自著はしがき・あとがき集

補巻

現代社会における芸術
新井白石の先駆性
日本の百科全書家新井白石
人民史家ミシュレ
今日の世界
林達夫について

駒井能登守のために
松本清張の処女作
人間性について
平和の条件としての文化
父の手帳
小島祐馬先生をしのぶ
追想——矢野仁一先生のこ
と
風神奔放
高橋和巳への弔辞
奇人
三上章を惜しむ
川端康成氏との一タ
夢
昔話
トレギエの二週間
ブータン入国記
ブータン国連加盟
名を知っているということ
緑陰読書
(『中央公論』)創刊一〇〇
〇号を迎えて

流行言
歴史のこまやかな味
カタカナの氾濫
幸福狩り
書についての雑談
大事件にひもをつけよ
すいせん文十篇
思い出すこと忘れえぬ人
虚子の散文
戦時下の登山
ブルデル雑記
スタンダールの世界文学賞
エコール・サントラル精神
ソ連の宗教
現代日本における古典のあり方
シンポジウムに招かれての感想

『文藝春秋』に収録された記事一覧

(『桑原武夫集』や『桑原武夫全集』と一部重複)

町一番の風呂(1944.11)
或る小事件(1949.9)
文学の害毒について(1951.3)
南方熊楠の學風(1952.12)
みんなの日本語(1953.4)
忘れられぬ學者(1954.4)
京都學派罷り通る〔鼎談:末川博(1892-1977)・恒藤恭(つねとう きょう、1888-1967)〕(1954.6)
何れが是か非か(1954.10)
あるソ連邦の共和国(1955.8)
自由過剰の國・日本〔対談:中谷宇吉郎〕(1956.8)
よき時代のよき教育者(1956.12)
西堀南極越冬隊長(1957.6)
揚州八怪から(1958.1)
「花塚の峰」の貧乏隊長(1958.11)
大正五十年(1962.2)
中江兆民(1964.8)
借金の名人・三好達治(1964.10)
大学入試は改革できる(1966.3)
まごころ(1967.2)

明治は日本のルネッサンス〔対談:松本清張〕(1968.11)
思い出すこと忘れえぬ人(1969.1)
港町での少年時代(1969.2)
錦林小学校時代(1969.3)
小島塾の二階の六畳(1969.4)
伯父さん列伝(1969.5)
不幸な友人たち(1969.6)
しらくもとグループ旅行(1970.1)
古風な恩師たち(1970.2)
濫読の楽しみ(1970.3)
思い出の“にわか”師たち(1970.4)
北海道の山旅(1970.5)
あこがれの少女たち(1970.6)
“人工日本語”の功罪について〔対談:司馬遼太郎〕(1971.3)
ブータン国連加盟(1972.2)
川端さんはこんな人だった(1972.6)
壮絶な準備(1976.11)

グラビア記事:日本の顔(1967.2)
グラビア記事:娘と私(1971.12)

余談ながら、『文藝春秋七十年史〔資料編〕(1994、全510ページ)』が1923~1991年の総目次です(非売品ですが“amazon”や“日本の古書店”などで入手可能で、2024年には同様に『百年史』が出ると予想されます)。総目次を眺めていると、1945年4~9月は戦争のため休刊、さらに1947年2月号は用紙難のため休刊という事実気付きました。また、1946年2・3月と4・5月はそれぞれ合併号になっています。当時の状況が伺われます。

編集人